

学生の衣服の色彩嗜好と色彩感情に関する分析

村山 和弘・油屋 直子

Analysis of Students's of Color Preference in their Clothes

Kazuhiro Murayama, Naoko Aburaya

(要旨)

衣服の色の嗜好性は被験者の年齢、性別、生活環境、性格、季節などの要因より、必ずしも一様でない。本研究では被験者が本学学生であり、要因もある程度共通性があることから、差異が大きいと思われる季節の影響について分析を行い、次のような若干の知見が得られた。

1. 単色（例えば上着）の嗜好性は、季節を問わず白や黒などの無彩色が好まれ、紫や黄緑は好まれない傾向にあった。
季節ごとの好きな色の χ^2 独立検定によると春は「薄ピンク」、夏は「白」、秋は「茶」、冬は「黒」の独立性が1%危険率で認められた。このことは、コレスポンデンス分析でも同様の結果となった。また、二色配色においても、好きな単色を取り入れたものが好まれる傾向にあった。
2. 色調の変化は年間を通して低彩度の色が好まれ、春夏は明度の高い色、秋冬は明度の低い色を好む傾向があった。
3. 好きな色と嫌いな色に対するイメージをSD法を用いて因子分析を行った結果、単色、二色配色とも3つの因子が検出できた。好まれる色では「美的因子」、二色配色では「健康的因子」が大きな値を持つものであることを分析できた。

キーワード：嗜好性 単色と二色配色、トーン、因子得点、季節

1. 緒言

現代の衣服を着用する目的の一つに「自己の美的感情の表現」がある。つまり、自分自身を装飾し、個別化し、自己顕示欲を満足させる手段として用いているというものである。

著者の衣服に関する消費者行動の分析によると、衣服を購入する際の基準の第一位に挙げられるのが「色」であり、廃棄理由の第一位も「色に関する劣化」である。このことは、衣服の色に誰もが多くの関心を持っていることを示している。

色に関する研究は、色彩学の観点から1894年ドイツのコーンによって色の好悪についての調査が行われ、順位法により、嗜好色を淡色より飽和度の高い色が好まれることを報告したのがはじまりである。日本においても1926年に今田¹⁾や水口、青木²⁾が実験心理学の観点から色彩嗜好の研究を開始した。ただし、当時の研究では純色だけを対象としたため色相の数も限られ、得られた結果も好き嫌いだけで他の属性は入っていない。

その後、色彩嗜好に影響を与えると思われる年齢、人種、パーソナリティーなどの固体要因や、居住地の習慣、気候、歴史などの環境要因等について研究されてきた。しかしながらいずれの調査でも一定の季節に、しかも色紙を用いており、実際布地を用いたものと視覚的に必ずしも同一結果にならない。

近年は科学技術の発展により生活の様式も多様化するとともに、季節による著しい差異が見られなくなっている。当然ながら衣服の色彩嗜好も季節感が認められなくなる傾向を示すものと考えられる。

そこで本研究では、学生の色彩嗜好について特定な季節だけではなく、春・夏・秋・冬の年4回調査し衣服の色の嗜好性と季節の関係について検討した。しかも、調査に際して人の絵に布地を貼り付け、着用しているイメージをしやすいように配慮した。同時に嗜好色についての色彩イメージも併せて分析するとともに、色彩学的観点からも解析を試みた。

2. 調査方法と分析方法

2-1. アンケート調査方法

衣服の嗜好色に関するアンケート調査を本学生生活創造学科学学生74名を対象に、2006年6月から12月までの期間とし、春の6月、夏の9月、秋の11月、冬の12月の計4回行った。アンケート内容は(1)今衣服に取り入れたい色(好きな色)(2)今衣服に取り入れたくない色(嫌いな色)(3)今衣服に取り入れたい配色(好きな配色)(4)今衣服に取り入れたくない配色(嫌いな配色)を上着だけの単色については(1)(2)について、上下服の配色については(3)(4)について、それぞれ上位3色を選択するよう依頼した。なお、色のサンプルは衣服のイメージをしやすいように人の形を記した絵に布地を貼り付けたもので、単色では15色、配色では20種類を用いた。これらの単色や配色は学校や街、雑誌などに季節ごとに多用されている色を用いるよう配慮した。アンケートで用いた試料の色とその色彩的分析値を表1に記した。なお、論文中の図表のサンプル識別はサンプルの記号で示すこととする。

さらにそれぞれ3位までの単色、配色については色の印象を分析するため、19対の形容詞を用いてSD法による5段階尺度で評定を求めた。

表1 試料の各色彩係数

	XYZ	L*a*b*	Pe (%)	主波長 λd (nm)	K/S	C*
A 白	X=89.3 Y=91.0 Z=107.2	L*=96.7 a*=-0.3 b*=0.9	0%	—	0.0043	0.94
B ベージュ	X=42.3 Y=41.2 Z=35.0	L*=73.4 a*=7.3 b*=17.3	18.8%	588.5	0.9526	18.7
C 黄色	X=68.6 Y=75.2 Z=13.9	L*=90.5 a*=-14.0 b*=86.7	76.4%	574.2	10.011	87.8
D 緑	X=8.5 Y=14.5 Z=10.7	L*=44.1 a*=-41.4 b*=14.7	21.0%	514.8	17.064	43.9
E 薄ピンク	X=64.3 Y=57.2 Z=65.6	L*=83.7 a*=20.1 b*=0.7	6.4%	539.2	0.2300	20.1
F オレンジ	X=42.1 Y=30.3 Z=6.3	L*=62.8 a*=42.9 b*=60.2	76.4%	593.8	12.176	73.9
G 濃ピンク	X=42.0 Y=28.3 Z=37.2	L*=59.3 a*=45.4 b*=-5.1	34.4%	500.5	2.4061	45.6
H 黄緑	X=22.5 Y=32.1 Z=12.5	L*=64.2 a*=-38.3 b*=41.0	50.4%	588.2	12.316	56.1
I 紫	X=11.6 Y=8.0 Z=21.7	L*=33.5 a*=31.2 b*=-27.8	45.8%	562.2	8.1349	41.7
J 赤	X=21.5 Y=11.2 Z=4.4	L*=98.9 a*=-1.7 b*=-1.5	69.0%	626.0	16.137	2.26
K 薄黄色	X=71.7 Y=77.3 Z=36.8	L*=97.3 a*=-0.3 b*=0.5	44.1%	571.9	1.441	1.04
L 青	X=10.2 Y=10.8 Z=36.5	L*=40.0 a*=-0.8 b*=-41.3	62.8%	478.2	17.881	41.3
M 茶色	X=8.4 Y=7.2 Z=5.6	L*=32.8 a*=12.5 b*=10.5	29.9%	594.3	9.3975	16.3
N 水色	X=47.8 Y=49.6 Z=83.1	L*=79.6 a*=-2.8 b*=-21.1	21.8%	479.5	0.3664	21.2
O 黒	X=2.2 Y=2.2 Z=2.8	L*=16.5 a*=1.5 b*=-1.3	3.1%	440.8	—	1.98

2-2. 分析方法

色の嗜好については、単純集計、 χ^2 独立検定、コレスポンデンス分析を、色の印象については因子分析を行った。さらに、色彩学的分析にはサンプルの三刺激値から定法により各色彩係数を算出し用いた。

3. 結果と考察

3-1. 単色（上着のみ）の嗜好性

はじめに、本学学生が季節を問わず衣服に取り入れたい好きな色（以下好色と略）と取り入れたくない嫌いな色（以下嫌色と略）を図1に記した。白や黒などの無彩色や薄ピンクなどが好まれ、紫、黄緑、オレンジなどが好まれないことを示しており、また茶色は好まれる色でもあり同時に嫌われる色であることがわかる。色彩好悪について近江³⁾の解説によると、好悪は時代とともに推移し、近年60年間の変遷については、青は現在まで好まれ続けているが紫は好色から嫌色へと変化を見せている。また、無彩色が好まれるようになるとともに、好みが暖色化あるいは明色化していることを指摘している。しかしながら本研究から得られた結果によると、黄緑が好まれない色であり黒が好まれるなど、必ずしも一致しない。このことは色の嗜好の分析はさまざまな要因を考慮して行う必要があることを示唆している。

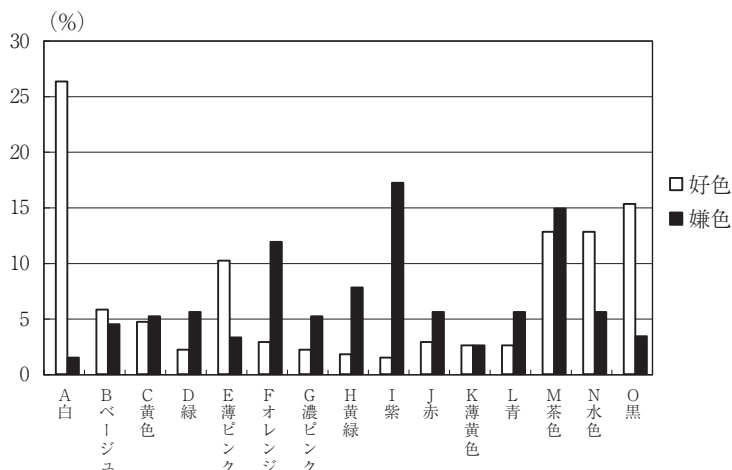


図1 衣服の嗜好色

表2に季節ごとに得られた好色と嫌色を記した。なお、値はいずれも相対的に分析できるように割合で表記した。白や黒などの無彩色が季節を問わず好まれており、紫、黄緑、オレンジはいずれの季節でも嫌われる傾向を示した。季節ごとにみると、春は薄ピンクと白が約30%、夏は半数が白を好んでおり、秋は茶色が36%と多くベージュも多く好む傾向があった。冬は42%が黒を選んでおり、茶色や白もそれに続いた。

嫌いな色は、春と秋が紫、夏は茶色、冬はオレンジを選択する割合が多かった。これらの値はアンケートから得られたままのデータで、それぞれの季節固有の値であると断定することは必ずしもできない。そこで各季節における第一位の好色と嫌色を例に χ^2 独立検

表2 各季節における衣服の嗜好色

	衣服に取り入れたい色 (%)				取り入れたくない色 (%)			
	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬
A 白	28.2	50.7	7.3	19.4	0.1	0.1	1.8	1.6
B ベージュ	4.2	1.4	20.0	1.6	5.6	8.5	1.8	0.1
C 黄色	4.2	8.5	5.5	0.1	2.8	0.1	9.1	9.7
D 緑	1.4	1.4	5.5	0.1	4.2	5.6	7.3	6.5
E 薄ピンク	28.2	4.2	3.6	4.8	2.8	1.4	3.6	6.5
F オレンジ	4.2	4.2	1.8	0.1	11.3	9.9	10.9	17.7
G 濃ピンク	4.2	0.1	0.1	1.6	5.6	4.2	5.5	6.5
H 黄緑	2.8	0.1	0.1	0.1	5.6	1.4	10.9	16.1
I 紫	0.1	1.4	1.8	1.6	23.9	16.9	20.0	9.7
J 赤	2.8	1.4	1.8	6.5	2.8	8.5	9.1	3.2
K 薄黄色	1.4	5.6	1.8	0.1	4.2	1.4	0.1	3.2
L 青	2.8	4.2	0.1	1.6	1.4	1.4	10.9	11.3
M 茶色	0.1	0.1	36.4	21.0	19.7	33.8	0.1	0.1
N 水色	11.3	9.9	0.1	0.1	5.6	1.4	9.1	8.1
O 黒	4.2	7.0	14.5	41.9	4.2	5.6	0.1	0.1

定を行い、それぞれ季節特有の色であるか検討し表3にまとめて記載した。表中の [**] は危険率1%で有意であり [*] は危険率5%で有意である、つまり独立性があることを意味し、[//] は1%、[/] は5%の危険率で独立性がないことを意味する。表によると春の薄ピンク、夏の白、秋の茶色、冬の黒に独立性が認められ、それぞれの季節固有の好色であると分析できた。嫌色は夏の茶色にのみ独立性が認められたが、その他の季節の紫やオレンジには独立性がなく、どの季節でも好まれないことを示している。この結果は、好色は季節の影響を大いに受けるが、嫌色は季節に関係なく好まれないということを表している。

表3 季節毎の好きな色と嫌いな色の χ^2 独立検定

	春	夏	秋	冬
〈好きな色〉				
A		[**]	[//]	[/]
E	[**]	[/]	[/]	[/]
M	[//]	[//]	[**]	[*]
O	[//]	[//]		[**]
〈嫌いな色〉				
F				[/]
I				[//]
M	[*]	[**]	[//]	[//]

次に表2を点グラフ化し、集計表の季節に情報が十分に引き出された値をあらわす分析手法であるコレスポネンス分析を試みた。つまり全15色と嗜好率平均の行列データをコレスポネンス分析にかけ、嗜好傾向の類似性により色と季節を整理した。図2、図3は嗜好傾向が似た色と似た季節が近くなるよう作成したもので、図2は好色を、図3は嫌色を表したものである。図により季節ごとの色が好まれる、あるいは嫌われるのかを明確に分類することができた。つまり χ^2 独立検定では季節ごと一番の好色と嫌色についての独立性しか明らかにすることができなかったが、コレスポネンス分析では他の色の季節ごとの属性を表示することが可能になった。例えば、春に好まれる色は黄色、薄ピンク、オレンジ、黄緑、薄黄色、水色などで、人数だけで表した表2と必ずしも一致せず、季節ごとの相対的位置付けができる。同様に嫌いな色は春の薄黄色、茶色、黒などで紫の選択数が多いにもかかわらず夏の嫌色として

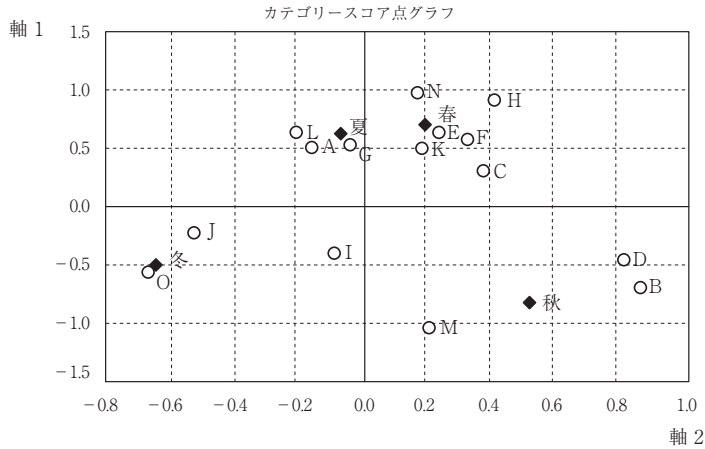


図2 好きな色のコレスポンデンス分析

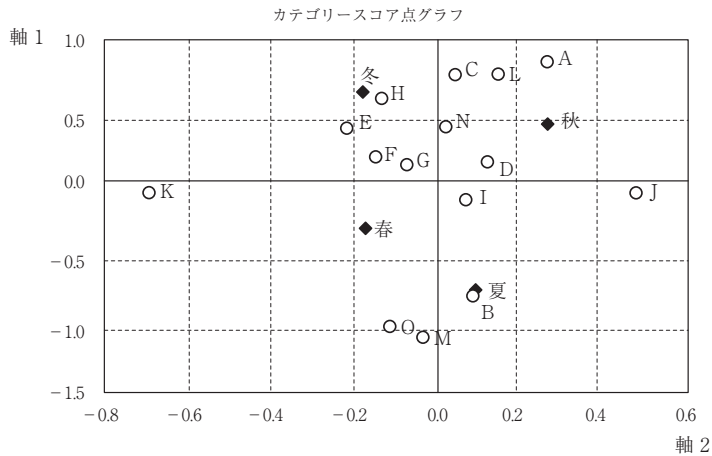


図3 嫌いな色のコレスポンデンス分析

分析されることなどが一例である。

次に色の嗜好性を色彩的観点から分析するため、各季節における好色と嫌色1位についてY（明度に相当する）とPe（刺激純度）の関係（日本色研配色体系ではトーンと表現する）を図4に記した。図によると春はYの値が大きくPeが小さい、いわゆるペールやホワイトトーンが好まれ、夏はライトグレーシュやホワイトトーンが、秋はYが小さくPeが中間程度のグレーシュやダルトーンが、冬はブラックやダークグレーシュが好まれる傾向があった。また、春や夏は秋や冬に好まれるダークグレーシュやダークトーンが嫌われ、秋や冬はYが中間程度でPeが大きくなストロングが嫌われる傾向にあった。これらの結果は、春・夏は軽やかなイメージのある明るく薄い色が好まれ、重いイメージのある暗い色が嫌われる傾向があり、秋・冬は暖かさや重さのイメージが強い暗く濃い色が好まれ、鮮やかな色が嫌われるということを示しており、色彩嗜好が季節により大きく変化することを見出すことができた。

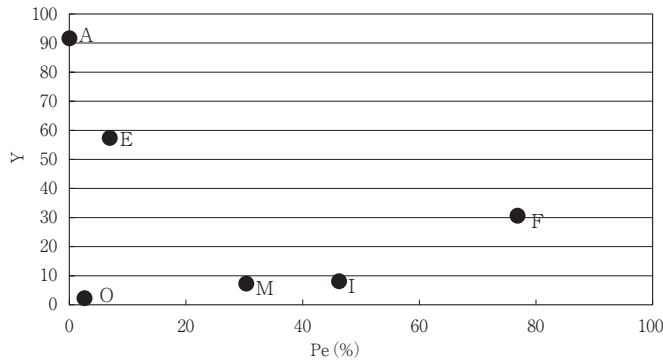


図4 各季節における好きな色と嫌いな色のトーン

3-2. 好色と嫌色の色彩イメージ

各季節の好色と嫌色の印象を詳細に分析するため、各季節の好色3種と嫌色3種、合計24色を19種の両極端形容詞尺度を用いるSD法で評価し因子分析を行った。表4はその結果をさらに解析しやすいようボルツマン変換を実施したもので、それぞれの季節における色の因子負荷量を記したものである。第一因子は、「好きな」・「美しい」・「上品な」などの尺度で表わされる「美的因子」、第二因子は、「派手な」・「個性的な」・「明るい」などの「活動性の因子」、第三因子は、「強い」などの尺度で表わされる「強弱性の因子」として分析できる。これらの結果は、オズグッド⁴⁾が単色の色彩感情を表現するために用いたものと類似する傾向を示している。さらに、回帰推定法により因子得点を求め表5に記した。また、各季節における第一好色と第一嫌色について第一因子と第二因子の関係を図5にまとめた。図によると好色は、季節を問わず第一因子の値が大きく、第二因子は春・夏が大きな値をもつが秋・冬は小さな値を示している。嫌色は全季節とも第一因子が負の値を示し、第二因子は冬のみ大きな値であるが、他の季節はいずれも負であった。以上のことから、好色は季節の如何を問わず美的因子の大きな印象の色で、さらに春・夏は活動性の高い印象の色が、秋・冬は低い印象の色が好まれる傾向を示した。また、嫌色はいずれの季節においても美的因子がかけている色で、しかも冬以外は活動性に乏しい色であることを導くことができた。

表4 色のイメージの因子分析

	因子1	因子2	因子3
好きな	0.9386	0.0347	-0.2296
流行の	0.9378	0.1229	-0.0805
似合う	0.9216	-0.0917	-0.0327
上品な	0.8409	0.0081	-0.4217
美しい	0.8200	0.2445	-0.3739
洗練された	0.7335	0.0222	-0.2626
快い	0.7032	0.1454	-0.3415
清潔な	0.6840	0.2764	-0.5022
静かな	0.6829	-0.2210	-0.6027
女性的な	0.6108	0.2254	-0.2365
派手な	-0.3035	0.8610	0.0039
個性的な	-0.1778	0.8578	0.2221
明るい	0.2550	0.8304	-0.4368
若々しい	0.4064	0.8184	-0.2492
現代的な	0.1848	0.7332	-0.1078
強い	-0.2741	0.2809	0.8063
暖かい	0.1251	0.4139	0.1746
軽い	0.4933	0.4940	-0.6925
やわらかい	0.4711	0.1672	-0.7705

第二、第三因子の関係から、嫌色はいずれも第三因子が大きく第二因子が小さい傾向を示したが、好色については一様な関係は見出せなかった。

表5 好きな色・嫌いな色の因子得点（回帰推定法）

	因子1	因子2	因子3
春好き1 (E)	0.8350	0.4606	- 1.4038
春好き2 (A)	1.5078	0.8332	- 0.1937
春好き3 (N)	0.6945	0.4834	- 0.9116
夏好き1 (A)	0.9357	- 0.0032	- 1.1090
夏好き2 (N)	0.5399	- 0.6295	- 2.0616
夏好き3 (C)	0.6028	1.6055	1.1766
秋好き1 (M)	0.3055	- 0.9932	0.6422
秋好き2 (B)	0.4975	- 1.0862	- 0.6618
秋好き3 (O)	1.3882	- 0.0044	1.1612
冬好き1 (O)	1.5891	- 1.2579	1.5189
冬好き2 (M)	0.8153	- 1.5008	0.6600
冬好き3 (A)	0.9939	0.6573	- 1.1420
春嫌い1 (I)	- 0.6392	- 0.6775	1.4658
春嫌い2 (M)	- 1.6971	- 1.4599	- 0.3683
春嫌い3 (F)	- 0.7800	- 0.1196	- 0.3116
夏嫌い1 (M)	- 1.0180	- 0.5754	0.0117
夏嫌い2 (I)	- 0.5585	- 0.3061	0.9625
夏嫌い3 (F)	- 1.1701	0.9275	0.4613
秋嫌い1 (I)	- 1.1428	- 1.1331	0.0353
秋嫌い2 (H)	- 0.3988	0.5509	- 0.1112
秋嫌い3 (F)	- 0.8455	2.4602	0.9858
冬嫌い1 (F)	- 0.2528	0.9531	0.9285
冬嫌い2 (H)	- 1.7200	0.7149	- 1.9511
冬嫌い3 (L)	- 0.4824	0.1003	0.2159

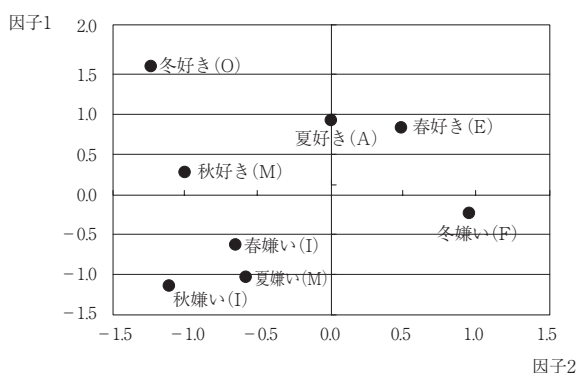


図5 第一因子（美的因子）と第二因子（活動性因子）との関係

3-3. 二色配色（上下の組み合わせ）の嗜好性

20種類の配色についての調査結果から得られた、各季節の好きな配色と嫌いな配色の第1位を表6に記した。表には併せて χ^2 独立検定の結果も示した。なお表の記号は表3と同様のことを意味しているのここ

では割愛する。表によると好きな配色は単色で好まれる色（春の白や薄ピンク、夏の白、秋の茶色、冬の黒）を取り入れたものが好まれている。嫌いな配色は黄色と青の組み合わせが夏を除いて選択され、季節間の違

表6 好きな配色と嫌いな配色

		春	夏	秋	冬
好きな配色	配色	白×黒	白×黒	ベージュ×茶色	茶色×黒
	χ^2 検定		[*]	[**]	[**]
嫌いな配色	配色	黄色×青	茶色×黒	黄色×青	黄色×青
	χ^2 検定		[**]	[**]	

いがなく単色と同様な結果となった。

次に、各季節の好きな配色と嫌いな配色の印象について因子分析を行ったところ、3つの因子が検出できた。第一因子は、「軽い」・「女性的な」・「清潔な」などの尺度で表現できる「健康的因子」、第二因子は、「似合う」・「好きな」・「流行の」などで表せる「価値観の因子」、第三因子は、「派手な」・「個性的な」・「強い」などの「個性的因子」である。

単色と同様、回帰推定法により因子得点を求め、配色の嗜好性について分析を行ったところ、好きな配色は第一因子が大きく、第二因子が小さい位置に分布している。嫌いな配色は第二因子が大きく、第三因子が0に近い位置に分布している。

以上のことから、どの季節においても健康的イメージが大きい配色が好まれ、価値観というイメージには依存しないことがわかる。また、価値観のイメージが大きく、没個性的なイメージがもたれる配色は嫌われる傾向があると分析できた。

4. まとめ

各季節における衣服の色の嗜好性に関してアンケート調査を行い、その結果を分析したところ次のことが明らかになった。

- (1) それぞれの季節における好きな色は、固定した色相で独立性が高い。嫌いな色は季節の如何を問わずほとんど同じで、色自体の嫌悪的感情が影響しているものと考えられる。
- (2) 色に対するイメージについて因子分析を行った結果、単色では「美的因子」「活動性の因子」「強弱性の因子」、配色では「健康的因子」「価値観の因子」「個性的因子」のそれぞれ三因子が検出できた。
単色では美的感情の強いイメージをもった色が好まれ、配色では健康的イメージの強い配色が好まれる傾向を示した。
- (3) 色彩学的分析結果から、春・夏はパールやホワイトトーンといった明るく薄い色、秋・冬はブラックやグレーシュなどの暗くて濃い色が好まれることが明らかになった。
- (4) 色の嗜好性をコレスポネンス分析することにより、各季節における好きな色と嫌いな色を相対的に位置付けすることが可能になった。

参考文献

- 1) 今田 恵：児童の色彩好悪、心研、1、373-393 (1926)
- 2) 水口ふく、青木誠四郎：成人における色彩嗜好に関する研究、心研、1、394-405 (1926)
- 3) 近江源太郎：色彩好悪の変遷、織消誌、28、352-357 (1987)
- 4) Osgood, C. E., Suci, G. J. and Tannenbaum, P. (1957)